神色師

恵久地健一　イラスト／空樹

ガラエト共和国北部の国ざかい。標高五千メートル級の山々が連なり、南北に長いアザフ大陸を仕切るように横断する、エルマトラ山脈。その山地に暮らす人々を、カルド族という。

ガラエトの初代君主にして、西方移民でありながら中央の統一をなしとげた、奴隷王グノスバール。カルド族は彼の支配や西方諸国の植民地化を逃れた原住民だ。

なだらかな斜面の所どころに密集した、色彩のとぼしい質素な家々。現在も昔ながらの狩猟と牧畜を生活の基盤とした地図に記される名もなき、小さなカルド族の村々。

そのひとつ。山の中腹へ位置した村の入り口に、一軒の大きな家がある。村で唯一の酒場であり、宿泊施設である。ただし客の大半は、村の男たちだ。店の主人も村長がつとめている。ようするに村の集会所だ。夕刻ともなれば男たちがつどい、おたがいに酒をくみ交わす。

山地の生活は厳しく、娯楽も限られている。それゆえ、彼らはわずかな喜びをみなで共有し合う。店内で時間を過ごす村人の誰もが顔見知りであり、親子であり、兄弟なのだ。

しかし今、その純朴な男たちのコミュニティーへ、もめごとの種がひとつ、外部から持ち込まれようとしていた。

■／1／

季節は冬――ただでさえ寒冷な山地において、ひとかけらの温もりも見逃さぬほど寒気の勢力が増す時期だ。こまやかな雪をもてあそぶように巻き上げる風が、ひょうひょうと冷たく吹き荒れている。酒場を囲う石壁は外の冷気をはばんでいたが、女の悲鳴に似た風の音だけは中にまで侵入し、聞くものの心に寒さをふりまく。

酒場の主人である村長は奥のカウンター越しにある調理場に立ちながら、厚みのある包丁をふり下ろす。鹿肉を解体する手は三十年以上の猟師生活でならされ、表面が黒ずみ無数のシワが刻まれている。

手元と交互して、顔を上げる。店の席は村の男たちが埋めつくしている。テーブルに置かれたロウソクにもすべて火がともり、陶製のカップに酒を入れたタンカードが配られている。しかし店内には普段ほどの喧騒がなく、うっそりとはびこる重たい空気が感じられる。

ただし入り口の一角だけは人だかりができ、そこで男たちが騒いでいた。

入り口は調理場から見て対角線上の端だ。ぶつ切りにした鹿肉を大鍋に煮え立つシチューの中へ放り込む。仕込みを終えた村長が騒ぎの元へ向かおうとした、そのときだ。

カウンターの横にある階段から靴の音が聞こえ、村長は顔を向ける。細身の青年が、ひとり二階から下りて来る。赤い髪に、白い肌。アゴには髪と同色の短いヒゲが生えている。

「あ、どうも。こんばんは」
赤い髪の青年は階段の下にいる村長に気づき、ほがらかな表情であいさつを交わす。
青年の名は、ジン・クエッティ。村の人間ではない。店で唯一の宿泊客であり、この付近ではめずらしい西方人だ。旅芸人として村に立ちより、一ヶ月ほど店に滞在している。
「おう、あんちゃんか」
村長は愛想なく答え、カウンター前の場所をゆずる。厚みのある一枚布の長服が、ジンの体にゆれる。カルド族の衣装だ。袖口と腰をヒモで絞り、中にシャツとズボンを着込む。外へ出るときは、その上から毛皮を着る。
「すまんが、あんちゃん。メシが食いたけりゃ、自分で用意してくれんか」
「それは、かまいませんけど。何かありました？」
入り口の人だかりと村長の表情を見くらべ、ジンは訊ねる。普段から岩のように厳しい顔をした村長が、さらに口元を難しそうに結んでいる。
食事の支度を押しつけられることへの異論はない。カルド族の村には通貨がなく、労働力や物品が対価とされる。村の男たちと違い、狩猟のえものを店に提供できないジンは宿泊費のかわりに店の作業を手伝い、ときには旅の話や歌を客たちに聞かせていた。
「今しがた外から人が来たんだが、どうも怪我をしているらしい」
「らしい？」
語尾の不鮮明さをとらえ、ジンは眉根にシワをよせる。
「たぶん上の村に住んでるやつだ。そいつが山で動けないところを通りすがりのやつが助けたらしいんだが、どっちも話を聞けなくてな――おう、お前ら。場所を空けやがれ！」
はげしい一喝が店内に響き、入り口の男たちが静まる。割れた人だかりに、村長が近づく。
ジンは背伸び立ちに目をこらし、騒ぎの中心をうかがう。横たわる人間の足が、人だかりの退けた床に見えた。動かない長靴が雪と泥にまみれている。
その横に、小柄な人影がうずくまる。体へ巻かれたマントに解けかけた雪をのせている。顔に防寒用の布を巻いているため人相は分からないが、村長が声をかけ、顔を近づける。
相手は寒さと疲労で声が出ないと見え、村長は耳を口元によせ、かたことのガラエト語で話しかけている。近隣の人間ではないのだ。ジンは様子が気になり、そっと入り口に近づく。
まわりでざわめく男たちの声から、床に倒れた人物のものと思わしき情報を拾う。
（上の村……村長の……ギート）
床に倒れているのは、カルド族の青年だ。怪我の様子は服の上から見た限りでは分からないが、目を閉じた顔には生気がない。

遭難者か――今年の山は例年にない寒さと雪に見まわれているという話を、ジンは村長から聞いていた。

普段なら空気がぬるみ、草木の芽がふくらむ時期にもかかわらず雪が解けないのだと。山の高台では積雪に道を閉ざされ、孤立している村もあるという。

お湯を入れたタンカードが、村長の指示で運ばれる。小柄な人物は目の前にさし出された陶製のカップに手を伸ばしかけたが途中で止め、その手で顔に巻いた布をはぎ取る。

瞬間、男たちにどよめきが広がる。布の下から白い顔を見せたは、若い女だ。長さのない金色の髪は少年のような形をして、わずかに先のとがった特徴的な耳をのぞかせる。

入り口だけではなく席に座る男たちも、その場で立ち上がる。店内の誰もが意外な正体に驚きを見せていたが、ほかならぬジン自身の動揺は彼らの比ではなかった。

「しっっ！」――師匠！

出しかけた声が途中で止まる。驚きのせいもあるが、黄色の瞳をした女の視線が一瞬ジンを射抜き、無言の重圧でノドを閉じさせたのだ。

お湯を飲みほした女は、空のカップをかえす。渡された村長の顔にも、困惑が見られる。

いくぶん疲労も回復したと見え、女は悠然と立ち上がり、手にした布をターバンのように頭へ巻いて結ぶ。その動作と同時に店内を見渡した視線がジンの顔に止まり、女の口元がわずかにゆるむ。それが不遜なトゲを込めた笑みであることを、ジンだけが理解できた。

「ほおぅ、これは聖音師どの。ずいぶんと、めずらしい場所で顔を合わせるじゃないか」

「いやあ……元気にお会いできて何よりです……」

おたがい西方圏の言葉による会話のため、カルド族の男たちには伝わらない。容姿や声色に不釣り合いな威厳と迫力を感じさせる口調も、分かるのはジンだけだ。

「なんだ、あんちゃんの知り合いか？」

床に倒れた青年の容態をうかがいながら、村長が訊ねる。

「知り合いというか、その」

まわりの男たちからも視線が集まる中、ジンは前に出て、カルド族の言葉で答える。

「ええと、彼女は俺と同じ芸人で、一緒に旅をしている仲間です」

名前は、ヨナ・ベルカウンター。仲間といえば仲間だが、ジンにとってはこの世でただひとり、裸で炎の中に飛び込めと命じられても逆らうことのできない相手だ。

「おいジン。話の時間は、あとだ。すぐにこいつの手当てがしたい。どこか温かくてベッドのある場所を借りられないか？」

鋭い口調で声をかけ、ヨナは倒れた青年

を指さす。それをジンが通訳して、村長に伝える。
この付近では旧時代の言葉が使われているため、国外の言葉はもちろん同じ国内でも中央のガラエト語は通じないのだが、ジンは一ヶ月の滞在でカルド族の言葉を習得していた。芸人や詩人に扮して世界中をまわる生活が長いため、言語の順応が早いのだ。
「彼を運ぶなら俺の部屋がいいでしょう。ベッドの用意もあるし、暖炉にも火があります」
「そりゃあ休ませるのはいいが、そのねぇちゃんが手当てするって？」
村長は不審そうな目つきを浮かべる。ジンはその視線からヨナを背中へ隠すように、ふたりの間に立つ。村長の反応は無理もない。ほとんど目にしたこともない異国の人間が相手だ。その上、カルド族において女という存在は一種の禁忌でもある。
「大丈夫ですよ。彼女はこう見えて、怪我や病気にくわしいですから」
「なんだ。何か問題か？」
背後からの声にふり向き、ジンは声をひそめる。
「あの、あちらはこの店のご主人で村の村長なんですけど。怪我人の容態は大丈夫かと」
「天香師の妙薬を少し飲ませたから体は問題ない。今のところ意識がないのは薬の作用で寝ているせいだ。ただ顔と足に凍傷が出ている。すぐに治療した方がいい」
「なるほど、分かりました」
「部屋が駄目ならかまわんぞ。ここにいる連中を全員眠らせて、この場で治療する」
物騒な発言に押されジンは村長に頭を下げ、懸命に説得する。ヨナならやりかねない。海の向こうでは過去に百人の兵隊と正面からやり合い、ひとりで戦場を混乱させたこともある。
「まあ、あんちゃんがそこまでいうなら、あんたらに頼んでもいいが」
「そうですか。ありがとうございます」
ジンはあらためて、村長に深く頭を下げる。
「それと聞きたいんだが。倒れていたのはひとりか？　ほかに誰もいなかったか？」
村長の承諾と質問をヨナに伝える。返答は「ひとりだ」とのこと。
「そうか、分かった――おう、お前ら！　酒がまわってないやつは手を貸せ！　こいつを二階へ運ぶ。それと誰か、ばあさまに怪我人のことを伝えろ！」
村長の大声で店内が動き出す。まだジンたちに視線を向け、何ごとか話している男たちもいたが反対や不満を口にするものはいない。それだけ村長の存在は絶対なのだろう。
「あとは念のため外の様子を調べる。五、六人でかまわん。出られるやつは準備しておけ！」
「ジン、お前は外にある私の荷物を運べ――ああ、それからな」

男に抱えられて二階へ運ばれる青年を見送りつつ、ヨナはジンの服をつかんで引き止める。
「なんですか？」
「お前への説教は、治療のあとだ。覚悟しておけ」
赤い瞳に畏縮の色を浮かべるジンの体を手で叩き、ヨナは村長に続いて階段へ向かう。
その姿が消えると、ほかの男たちからジンに向け、彼女との関係を冷やかす声が飛んだ。
外見はジンよりも若く見える女の姿だ。言葉の分からない彼らが、親密な関係を想像してからかうのは無理のないことだが。背中へ浴びせられる言葉を曖昧な苦笑で受け流しつつ、ジンはヨナの荷物を取りに店の外へと向かった。

■／2／

服を脱がされたカルド族の青年が簡素なベッドで寝かされ、毛布をかけられている。
酒場の二階。ジンの宿泊している部屋だ。石壁に窓はなく、家具といえば質素なテーブルと椅子。それに明々と燃える暖炉。ひとり部屋のため、中に三人もいると狭く感じる。
床に散乱した服を片づけながら、ジンはベッドの横で作業するヨナに視線を向ける。彼女は椅子に座り、テーブルの上にさまざまな道具を並べていた。
頭に巻いた布はそのままだが、雪で濡れた服は着がえていた。薄地の毛布をマントのかわりに羽織り、その下のシャツとズボンは体の面積に合わせたスリムなもの。胸から胴体に皮製の前かけ。腰に巻かれた太いベルトには、いくつかのホルスターとポーチがついている。
背中の毛布以外は職人の作業服という姿だが、彼女にはそれが普段着なのだ。
「それにしても、師匠が人前でその姿をしているのはめずらしいですね」
「んー、仕方あるまい。いつものサイズだと怪我人を運べないだろう」
手元の作業に集中したまま、ヨナは答える。テーブルの上には白い陶製の小びんがいくつも置かれている。そのひとつを手に取り、もう片方の手に持つ細長い筒の中へ小びんの口をかたむける。筒に移しかえられた小びんの中身は、色のついた粉だ。
持ち上げた筒に水さしの中身を少し注ぎ、分量を確かめ、また少し注ぐ。
「おーい、ジン。暖炉の火を強くしてくれ」
粉と水が混ざるように筒を軽くふりながら、暖炉の前で椅子に座るジンを呼ぶ。濡れた服を暖炉で乾かしていたジンは足元に置かれたカゴから薪木を取り出し、炎の中にくべる。
火力が強まるよう手にした棒で暖炉をかき混ぜようとするジンに、ヨナはわずかに

視線を動かし、作業を止めた手で壁の前に置かれたものを指さす。
「そうじゃない。そっちを使え」
入り口近くの壁には木製のリュートが立てかけられていた。ジンが常に携帯する楽器だ。
雫型をした円形のボディーに、指板を取りつけた細長いネック。平らな板の中央に穴を空けたボディーの表面から、ネックの先端にかけて六本の弦が固く張られている。
椅子に戻ったジンは、手にしたリュートをヒザにのせて座る。両手の指で弦の上下を押さえて姿勢を決めるその表情は、真剣なまなざしで指先を見つめている。
ヨナが作業を続けながら耳をかたむける中、ジンの演奏がはじまる。
ボディー側の指が六本の弦をこするように踊り、ネック側の指が弦の振動を制御するように指板の上をすべる。その素早い動きは、長い手足で糸をつむぐ蜘蛛のしぐさを思わせた。
しかしヨナの耳には、リュートから流れ出たはずの音が聞こえない。
いや、音は出ている。認識できないのは音があまりにも、周囲に溶け込んでいるためだ。
息をひそめて耳の神経を研ぎすませば、聞こえるのは外で吹く風の音。暖炉の中で燃やされた薪木が、ぱちぱちとはぜる音。炎にあぶられた空気が風のように渦巻く音。
ゆらり、と赤い炎が大きく伸び上がる。その動きを注意深く見れば、炎がありえない速度で成長しているのが分かる。さらにそれは、リュートを奏でるジンの指に呼応している。ただし卓抜したヨナの視覚でしか追えない動きだが。
ジンが演奏するのは曲と呼べるものではなく、天地自然の音そのもの。薪木のはぜる音も熱せられた空気の音も、すべてジンの手が再現した音だ。勢いよく燃えていたのは音の方。その音が暖炉の炎に作用し、火力を引き出したのだ。
完全なる音を操ることで、事象に影響を及ぼす能力者――聖音師。
「腕は落ちてないようだな」
その言葉にジンの表情から真剣さがゆるみ、おだやかな笑みが広がる。
それはこの世で、ジンにしかできない。彼に能力の存在を教えたヨナでも、実践することは不可能だ。人の耳は限られた領域の音しか聞くことができない。だが実際には高低のすみずみに及ぶ広大な音域が存在し、自然には人の想像を超えた表現の豊かな音の世界がある。
ジンの耳は、それを感じることができる。単純に自然の音を真似るのではない。すべての音域を完全に一致させた音を奏でなければ、その奇跡を引き起こすことはできない。
「お前に説教をする材料が減って残念だ」
ジンの視線を断ち切り、ヨナは準備を終えて立ち上がる。
「さて私もやるか」

背中から毛布がすべり落ちる。テーブルの上に置かれたいくつもの筒を手に取り、ベルトのホルスターへ順番にさし込んでいく。筒の中に入れられたのは定着剤を混ぜた水溶液と、それぞれの色粉。つまり今の中身は絵具だ。

「あ、俺も手伝います」

ジンはリュートを置いて立ち上がり、ベッドのそばへ歩みよる。青年にかけられた毛布をずらし、足元と顔の下、首の辺りまで見えるようにする。容態が落ちついたらしく青年の体に赤身がさしている。だがそのせいで、凍傷の症状が余計に目立つ。顔の所どころがやけどをしたように赤く腫れ、足の方はむくんだように白く、血の気が足りていない。

「手出しは不要だ。下がれ」

「失礼しました……」

ヨナは両手に手袋をはめていた。指先のない皮製の手袋だ。指のつけ根、それぞれ十本の部分へ指よりもわずかに長い絵筆が取りつけられている。軸を調整された絵筆は、それぞれの指を伸ばした際に先端の長さがそろうように作られていた。感覚としては絵筆つきグローブ。あるいは、つけ爪に近いかもしれない。ジンは少し下がり、彼女の様子を見守る。

「まずは顔だな」

ヨナは両指の絵筆を筒の中に入れ、引き上げる。十本の白い筆先が五色に染まる。左右それぞれに黒、青、赤、黄色、白。絵筆をつけた両手が青年の顔に近づき、一瞬止まる。顔色を見たのだ。凍傷におかされていない部分の肌を確認し、ヨナの指が動き出す。

ジンの目にはその動きが、ピアノの鍵盤を弾いているように見えた。手首から先が左右に動き、指が素早く上下する。だが実際には目で見ている以上の速度で指先が動いている。

青年の顔から、見るみるうちに凍傷が消える。正確には凍傷の部分が塗りかえられているのだ。青年の顔をカンバスがわりに、ヨナの絵筆が肌の色を再現している。

通常の絵師はパレットの上で絵具を混ぜて色を作る。だがヨナは直接、わずか五種類の色を対象の上に塗りかさねることで瞬時に色を作り出す。そしてその色は、奇跡をもたらす。

「さて次は、足か」

今度は足の上で、ヨナの両手が動き出す。この世のどんな絵師も、彼女の技法を真似ることはできないだろう。

十本の絵筆を指につけて操る技術もさることだが、何より実物の対象と完全に同じ色を作り出すことができるのは、ヨナだけなのだ。人をふくめ、視覚を持つ生物全般は同一の色を見ることができない。生物が違えば視覚も異なり、同じ種族でも色覚には個体差がある。まったく同じ赤でも、人の見る目が違えば黄色が強く見え、あるいは青みがふくまれて見える。

目の数だけ異なる風景の世界が存在し、

正確な色は誰にも分からない。その中でヨナは固有の色を正確に見ることができる。彼女の瞳に映る色こそ、自然が持つ唯一の色なのだ。

絶対の色彩を作り出すことで、事象を復元し変成させる能力者――神色師。

「神技『活性の肌色』！」

ヨナの指が止まる。それはまさしく神の技といえるだろう。魔法と呼べるほど不思議なものではなく、技術と呼ぶには人知の域を超えている。ジンの耳がこの世でただひとつの超感覚を宿すように、ヨナの目にもそのひとつが授けられている。

「さすが、お見事でした」

ジンは床に落ちた毛布を拾い、椅子に座るヨナの背中にかける。

「まあな。凍傷以外の怪我をせずにすんだのが幸いだろう。いちおう私の荷物から包帯を出して足に巻いてやれ。凍傷が消えても、まだ感覚のしびれや熱が残るはずだ」

ヨナに命じられるまま、ジンは部屋のすみに置かれた荷物を取りにいく。ジンが部屋に運んだ荷物だ。大きなリュックがひとつに、肩がけのカバンがひとつ。

ジンはリュックから取り出した包帯を片手にベッドへ戻り、青年の両足に巻く。凍傷はもう完全に消えていた。肌に赤味がさし、足の裏に浮き出たシワも見える。ヨナが筆を走らせた形跡は、どこにも残されていない。本当に筆舌しがたい能力だ。

「それにしても、よく彼を発見できましたね」

「運よくというべきだな。林の中で雪と風をしのごうとしたら、地面に倒れていたんだ」

テーブルの道具を片づけながら、ヨナは答える。ベルトにさし込んだ絵具入りの筒はそのままに、コルク栓で口だけ閉じる。絵筆つきの手袋は筆先を洗い、腰のポーチに戻す。

「私でなくとも誰かが見つけただろうが、危ない状態ではあったな。何かの事故に襲われたのかもしれないが、この雪山で荷物もなしに体ひとつというのは普通じゃない」

確かに、とうなずきジンは青年の体に毛布をかけ直す。そのとき、ふと青年の顔に動きが見えた。わずかに口が開き、まぶたが閉じたまま動いている。

「師匠、彼の意識が！」

「ああ騒ぐな。こっちの水さしはまだ綺麗だ。少し飲ませてやれ」

ジンは渡された水さしの注ぎ口を、青年の口元に近づける。

「何か言葉を話しているみたいですね」

無意識のまま水を飲み込んだ青年のくちびるが、ふるえるように上下している。

「林の中で助けたときも何かつぶやいていたな。ここへ運ぶ途中までは、まだかすかに意識もあったんだ。言葉は分からんが、たしかグーとかなんとか」

（グ……ラ……ニ）

くちびるの動きを読み取り、ジンはそれ

を頭の中で置きかえる。
「グラニ――たぶん恋人の名前だと思います」
「どうして分かる？」
「さっき村長から聞いたんです。彼の名前は、ギート。住んでいるのはここよりも山の上にある村で、ここの村には彼の婚約者がいるそうです」
ヨナが服を着がえている間に、ジンは部屋の外で村長と話していたのだ。
「それと彼の胸にある木彫りの首飾り。あれはカルド族の春祭りで未婚の女性が男性に送るものです。それを男性が首に一年間かけ続ければ、次の春祭りに結婚を申し込めるんです」
ふむ、とヨナはうなずく。首飾りはヨナも見た。丸い板に花の意匠が彫られたものだ。
「カルド族の女性は家の中にいて、山の一族が集まる春祭りのときしか、身内以外の男性と会う機会がないんですよ。年頃の女性は誰とも知らない相手に向けて、首飾りに花の意匠と自分の名前をきざみ、男性は順番を競いながら、山の女神エリルのやしろに奉納された首飾りを取りにいく。おたがい顔も知らない男女がひとつの首飾りで結ばれる。いやーロマンスだ」
「そうか？　私ならそんな賭けごとじみた方法で婚約者を決められるのは、ごめんだが」
少し声に疲れの見えるヨナの言葉に、ジンは苦笑を浮かべる。確かにこの方法では男女の自由な恋愛ができず、個人の意志も生かされない。だがそれも厳しい環境の中で人々が生き残るために生まれた文化だろうと、ジンは思う。
ほかにもカルド族には山の女神が嫉妬するという理由で、女を山に入れない風習がある。それも女を家に束縛するものではなく、山の危険から遠ざけるための意味があるのだろう。
「まあ上の村は今、雪に道を閉ざされて孤立しているという話ですから。彼は何かの理由で助けを求めるために雪を超えて、婚約者のいるこの村に来るつもりだったんじゃないですか」
「ふむ、それだけじゃないだろ。もし私が同じように厳しい環境に閉じ込められて近くに大切な恋人がいるとしたら、相手が自分と同じ目で苦しんでいないか心配するよ」
「なるほど。師匠も意外とロマンサーですね」
と軽口で受け答えたところ、ヨナに睨まれた。
「お前それより、ずいぶんこの土地にくわしいみたいだが、いつからここにいるんだ？　私との合流をすっぽかして、一体お前はここで何をしていた？」
「いや、そんな……くわしいというほどじゃ。たまたま酒場で色々な話が聞けただけで」
おたおたと弁明しながら、ジンはヨナの

そばを離れ、入り口の方へ後ずさる。
「それじゃあ俺は、彼の治療がすんだことを村長に伝えないといけないので。すいませんが、ちょっと下にいってきます」
後ろ手に扉を開け、ジンは体をすき間へ押し込むように部屋を出る。ヨナを見ればベッドの青年に顔を向けたまま、呼び止める声はない。ただしジンが扉を閉めようとしたとき、
「まったく男というやつらは……」
とつぶやくヨナの声が聞こえた。その言葉は、どこか治すことのできない古傷の痛みにたえるような、やりきれない響きが感じられた。

■／3／

熱いお湯に満たされた、高さのない木の桶。その水面に白い足がゆらいでいる。指先に並ぶピンク色の爪が、水中に咲く花びらのように愛らしい。
「んー、極楽だ」
両足をお湯につけたヨナが気持ちよさそうに表情をゆるめ、うっとりと声をもらす。ベッドに腰かけ、ズボンをヒザの位置までめくり上げている。いわゆる足湯と呼ばれるものだ。
マントを体に巻いた彼女の手には木の皿があり、鹿肉のシチューが盛られている。しかも湯気の立つそれはすでに二皿目で、食べ終えた空の皿が床の上に置かれていた。
「それで、どうしたジン。下を向いてないで、しっかり私の顔を見て続きを話せ」
「ええと、はい……」
頭上からの声に、ジンは顔を上げる。ヨナの前で床に座らせられているのだ。両ヒザをそろえて床につけ、お尻を両足の上にのせた正座である。場所はカルド族の青年を治療した部屋の向かいにある別室。青年の容態はまだ完全に回復したとはいえないが、あとの処置は村長らにまかせ、ジンたちは荷物ごと部屋を移動したのだ。
その後の現在は、ヨナによる容赦なき説教が進行中である。
「じゃあ俺のいた船がひどい嵐に襲われて、なんとか転覆だけはまぬがれたあとですけど。海を遭難したぶん予定の港に入れなくて、大陸の北へ流されたんです」
「うん、そうだな。そうでもなければ、私より早い船で先のりして色々と調べるはずだったお前が、合流する町に来ないはずないよな」
説教の内容は、ヨナと合流するはずのジンが予定を守らず、カルド族の村にいたこと。ヨナたちはある目的のために、はるばる海を越えて東方の開拓地まで来たのだ。
「だが北に流されたのなら、すぐに陸路で南の町まで来ればいいだろう。怪我や病気で動けなければべつかもしれんが、港よりさらに北のここにいたことが理解できん」
「はい、俺は無事でしたが。船の乗客に旅芸人の一行がいて、その中の楽師さんが遭難のせいで重病にかかりまして。音楽がな

くては、彼らがこの大陸で興行することができない。とはいえ、楽師さんを治療するためにもお金をかせがなければならない。これは困ったどうしようと話している彼らを、俺が横で見ていまして」
「ほおぅ、それで？」
　話の先はすでに分かっていたヨナだが、シチューを食べながら続きを聞く。
「そこで俺が彼らに話しかけまして。よければ楽師さんのかわりに興行の音楽を引き受けようかと一曲披露したところ、ぜひと頼まれまして。しばし一行へ加わることになったのです」
「お前は、英雄伝承で主人公の仲間になる脇役か？」
「……すいません、本当に。ただ困っている人を見捨てるわけにはいきませんし」
　ジンとしても旅の目的を忘れたわけではない。付近の情報を集めるかたわら、旅芸人たちの手伝いができればよいと考えたのだが。
「いずれにせよ、ガラエト国内を調べる予定だったわけですし。あとで師匠と合流することも考えながら、しばらく一緒に行動していたんですが。北の方でカルド族の春祭りがあることを知りまして。そこで芸が披露できればと村をおとずれたところ、まだ山は雪に閉ざされて春祭りどころではないと。それで芸人さんたちは、ふもとの町へ戻ったんですが」
「お前は山を下りず、この村に残ったわけだな？」
「いやあ、だってここの人たちも可哀想じゃないですか。ただでさえ娯楽が少ない上に、春祭りもできない。それじゃあ、せめて旅の話と歌で楽しませてあげようと思いまして。それに俺がここに残れば、春祭りの開始を芸人さんたちへすぐ伝えられますし」
「人情に流されるシャボン玉か、お前は。壊れて消えろ、この唐変木！」
「ぐあっ熱っ！」
　ぱしゃあ、とヨナは片足を蹴り上げ、桶から飛び出したお湯がジンの顔面に襲いかかる。
「熱くないだろ。大げさなやつだ」
　ヨナは桶のお湯を足でかき混ぜながら、顔を両手でおさえてのけぞるジンを見下ろす。
　桶には小さな銅製のつぼが置かれ、中に焼けた炭が仕込まれている。足湯の温度を保つための工夫だろう。ヨナが二皿目を完食したシチューもふくめ、両方とも青年を治療した対価として村長が用意してくれたものだ。
「いや、ですが。師匠の教えにも義を見てせざるは、勇なきなりと」
「踊り子のジリオラ」
　お湯を浴びた顔を手でふきつつ体を起すジンに、ヨナはスプーンの先を突きつけて女性の名前を口にする。その言葉に、弁明を告げようとするジンの声が止まる。
「ふもとの町で旅芸人たちに話を聞いたが、

美人の娘がいるじゃないか。私がお前の知り合いで会いにゆくところだと話したら、いつ山を下りるか訊いてくれと彼女に頼まれたよ」

この村でヨナがジンと出くわしたのは偶然ではない。合流に現れないジンを探すうち、旅芸人の一行に赤い髪の西方人がいたという話を聞き、足取りを追いかけてきたのだ。

「お前のことだ。ちょっと一緒に旅をして手を出したら逆に相手から深い関係をせまられて、困ったあげくに身を隠してほとぼりを冷まそうとか、そんなところだろう」

「いえ、俺はそんなつもりは全然」

「まあ彼女には私から説明をしておいたから安心しろ。お前は男の尻が大好きな衆道家で、女性と関係を持つときは金が目的だと。ついでにお前が裸で男と抱き合っている絵を二枚ほど描いて渡したら、涙を流していたぞ」

がくりとうなだれるジンを見て、ヨナは不遜に鼻で笑いつつ腰のベルトに手をやり、ポーチから絵筆つきの手袋を片方だけ取り出す。片手に手袋をはめ、空の皿に足湯のお湯をひしゃくで注ぎ、銅製のつぼに入れられた炭を木バサミで取り出し、同じく皿にのせる。

「ジンよ。お前にとって女性とはなんだ？」

「はい、師匠。俺にとって、この世で女性と呼べる存在は師匠だけです」

顔を上げ、正座の姿勢を整えて過去の教えを口にするジンに、ヨナはうなずく。

「うむ。今後は毎日、その言葉を食前と食後に唱和するというなら許してやろう」

ヨナはマントの前を開き、腰のベルトにさし込んだ絵具入りの筒を開ける。片手に皿、片手に絵筆。口を開けた筒の中に絵筆を入れ、色のついた筆先を皿の上に走らせる。

「神技『無限のシチュー』！」

「またそんな能力の無駄づかいを……」

タイトルを口にするヨナを、ジンは弱くたしなめる。言葉に出さずとも神色師の能力は発動できるはずだが、頭に浮かぶ色彩のイメージをつい声にしてしまうのは彼女の口ぐせだ。

「私のじゃない。お前にやる分だ」

無造作に突き出された皿の中を見れば、ホワイトクリームのスープに淡いセピア色の肉片が浮かぶ鹿肉のシチューがあった。記憶した色彩から事象を復元し変成させる神色師の手にかかれば、ただのお湯と炭から瞬時にシチューを再現することも可能なのだ。

ジンは足をくずして座りなおし、渡された皿とスプーンをうやうやしく手にする。

「俺にとって、この世で女性と呼べる存在は師匠だけです。いただきます」

「よし許す」

元々ヨナが食べた二皿のうち、片方はジンの分として用意されたものである。白いスープを口にすれば、コクのある牛乳と香ばしい小麦粉の風味が広がる。味はまぎれ

もなくシチューだが、原料はヨナが足をつけたお湯である。ジンは複雑な気持ちで、シチューを飲み込む。
「それで、肝心の情報はどうした？」
「ええと、魔巧師の手がかりですよね？」
「ほかにどんな情報があるんだ……」
手からはずした絵筆つきの手袋をかたわらのテーブルに置き、ヨナはため息を吐く。
ヨナとジンの能力は、元々この世を作り出した二神のひとりとされる存在が有したものだ。創世後、その神はもう一方の神に体をきざまれ、その肉は生命の種として地上にまかれた。また世界を繁栄に導くため、体と共に切り分けた五感を五人の使徒に授けたという。
その神の実体がいかなる存在だったかは、ヨナにも分からない。現代のどの宗教にも、その存在は記述されていない。だがそこに登場する神の感覚を受けついだ五人は、実在する。
視覚の神色師。触覚の魔巧師。聴覚の聖音師。嗅覚の天香師。味覚の地喰師。ヨナの旅はその中でただひとり所在の分からない、魔巧師を探すための道のりだ。
「俺の方は、特にこれといった情報は――あ、本当にちゃんと調べたんですよ」
「べつにお前が何もしていないとは、いってないだろう」
答えるヨナは頭に巻いた布をはずし、お湯から引き上げた足をそれでふく。
「師匠の方はどうでした？」
「ひとつだけ当たりはあったが、あとに続く情報がさっぱりだ」
手にした布をテーブルに置いて靴をはき、ヨナは足湯をどかして立ち上がる。その足で部屋のすみに置かれた荷物を取りに向かい、リュックと肩がけのカバンを手にして戻る。
「グノスバールについては、お前も調べたな？」
「ええ、もちろん。今回の調査対象ですし」
英雄グノスバール。およそ百五十年前、西方から奴隷兵としてこの地に連行されたが、ただひとり脱走したのちに原住民の部族を結集させ、大陸の中央を支配した西方諸国に戦いを挑んだ男である。十年におよぶ独立戦争を勝利に終わらせ、西方諸国の退去後はガラエト（現在は共和国）の建国に関与し、激動の生涯を六十代で閉じるまで、初代君主をつとめている。
奴隷という最下層から君主にまでのぼりつめた彼を、人々はあこがれと皮肉を込めて奴隷王と呼ぶ。また彼と共に戦い抜いた人々の中にはすぐれた能力を持つものが多く、古代の神話や叙事詩のごとく語りつがれる当時の戦乱を、ジンはこの土地で聞かされた。
「そのグノスバールに協力した魔女から、話を聞くことができた」
ベッドに腰を下ろしたヨナは、カバンからスケッチブックを取り出しジンに向けて開く。
紙面には玉座のごとく豪奢な椅子に座る

女性の姿が、黒い線で描かれていた。長い髪、長いドレス。右手には動物の頭骨らしきものをのせた、奇妙な形の杖がにぎられていた。
「え、これがその魔女ですか。グノスバールが死んだのは百年以上前の話ですよね？」
　スケッチブックの中で正面を向いた女性の顔は、ジンとさほどかわらない年齢に見える。
「タリザ・アズラエル。グノスバールが最初に接触した部族の巫女だったらしいが、元は普通の人だ。タリザが彼に協力したとき、魔法の知識と不死の法を授けたやつがいたそうだ。彼女はその魔力で当時とかわらぬ姿のまま、地下迷宮の奥深くに生き続けていた」
　言葉をかさねるヨナの声がけわしさを増し、表情に影が浮かぶ。
「魔巧師、ですか」
「ああ。やはり、やつはこの大陸に渡り、グノスバールの協力者に紛れていたらしい」
　ジンはヨナの話を聞きながらシチューを食べ終え、空の皿を床に置いて一礼する。
「俺にとって、この世で女性と呼べる存在は師匠だけです。ごちそうさまでした」
「ふざけているのか、お前は？」
「しっ、師匠がやれといったんですよ」
　ヨナは「まったく」とあきらめたようにつぶやき、ジンにスケッチブックを渡す。
　ジンが受け取ったスケッチブックをめくると、次に描かれた絵の中に角度を変えたタリザの顔や、手にした杖だけを大きく抜き出して描いたものがあった。
「その杖を持てば強力な魔法を使うことができると、やつがタリザに教えたそうだ。手にしたものにあらゆる知識をあたえ、秘めた魔力を引き出す杖だ。おそらく、やつの持つ知識そのものが何かの方法で取り込まれているのだろう」
「まさに魔法の杖ですね」
「タリザは『万理の杖』と呼んでいたよ」
　愛した男と部族の民を守るために強いちからが欲しかったのだと、魔女はヨナに告白した。
　本来なら魔法は失われた古代の技術だ。現在では知識を持つものはなく、呪文と魔力で自然を自在に操るものは昔話の中にしか存在しない。先代の神色師であるヨナの養父が伝えた話によれば、神の肉より生まれた人類が世代をかさねるごとに能力を薄れさせ、新たな技術が生まれる中で魔法は歴史の変化に埋没したということらしい。
　だが魔巧師は手に触れるだけで、万物の構成を理解する能力を持つ。すなわち魔巧師はこの世のあらゆる知識を得ることができ、失われた魔法の技術を得ることも不可能ではない。
　次にヨナはリュックの口を開け、片手で中を探って取り出す。
「そしてこれが、杖の本体だ。今は『万理の石』というところだな」

ヨナが手にしたのは、片手におさまるほどの丸い石だ。色は黒みをおびた灰色。ゆがみのない完全な球形をして、表面に磨かれたような光沢がある。

「見た目には普通の石みたいですね」

「今は普通の石さ。私が杖を破壊したとき、中から出てきたこれを石の色で封印したんだ」

地下迷宮においてヨナとタリザが戦いを繰り広げたときだ。元はルビーのような真紅の輝きを放つ宝珠だったが、危険な存在であるためヨナが神色師の能力で石にかえたのだ。

「大変だったよ、まったく。タリザと話し合いをつけようとしたら、いきなり変な剣士が現れて邪魔するし。魔巧師の思念に支配されたタリザが怪物に変身して大暴れするし」

「またひとりでそんな無茶を――」

と口にしかけたジンはふいに殺気を感じ、とっさに手にしたスケッチブックを腕に抱き、倒れ込むようにして床の上を転がる。

「逃げるな、馬鹿たれ！」

「そんな石を当てられそうになれば、誰でも逃げますよ！」

ジンが床を転がる瞬間、石を握る指を向け、腕を後ろに引くヨナの姿が見えたのだ。

「ホントに、スケッチブックの方に当たったらどうするつもりですか」

「そのときは守らなかったお前の責任にして、死ぬほど説教するに決まっているだろう」

ヨナは真顔で答え、両手の間で石をもてあそぶように投げ合う。

「だいたい私がひとりで苦労したのは、お前が予定どおり合流しなかったせいだぞ」

「それは、ご迷惑をおかけしたと思いますけど……」

体を起したジンは気まずそうに口ごもり、おずおずとスケッチブックをヨナに差し出す。

「さてそれでだ、ジン。ここでお前が私に協力すれば、この石を利用して魔巧師の行方と情報を入手できる作戦がある」

スケッチブックをカバンの中に戻したヨナは、ふたたび石を手にしてジンに向き直る。

「作戦、ですか」

その言葉に物騒な空気を感じたものの、ジンもヨナと向き合う。

それから十分後。ヨナは計画の内容を一方的に説明してジンに伝えると、ベッドへ横になり毛布の中にもぐり込んでしまった。ジンの承諾や反論は、当然おかまいなしだ。

「少し寝る。日づけが、かわる頃に起してくれ」

とだけ伝え残し。計画の実行は夜半だ。

ひとり部屋にたたずむジンは胸に不安を抱えつつ、ヨナがベッドへ入るときに脱ぎ捨てたマントやホルスターつきのベルトを拾い、テーブルに置かれた絵筆つきの手袋や布と一緒に片づける。

ベッドを見れば、入り口側に後ろを向い

たヨナの頭がある。早くも眠りについたのか、金髪の後頭部はぴくりとも動かない。疲れもあるのだろう。ひとりで雪山をのぼり、怪我人をここまで運んで治療したのだ。なのに休むことなく、またすぐに行動だ。

のんびりできる旅でないことはジンも承知している。ヨナと魔巧師の間に個人的な因縁があることも理解しているのだが、無理はしたくないし、彼女に無理をさせたくない。

「……ヨナ」

片づけを終えたジンは、ベッドへ聞こえぬように小さくつぶやいて立ちつくす。体にかけられた毛布のふくらみが背中のラインを無防備に浮かび上がらせている。そのベッドにもぐり込み、彼女の体を抱きしめたい衝動にかられるが、それはできないし、してはいけない。

ジンとヨナの関係は、手と頭だ。ジンは彼女の命令で動き、自分で悩む必要がないかわり、近くにいてもヨナの意思がなければ頭である彼女をなでていたわることもできない。

ジンは入り口に向かい、壁に立てかけたリュートを手にして部屋を出る。夜の冷え込みが進み、廊下に出るだけで吐く息が白い。ヨナにベッドを使われ、治療中の青年にもベッドを使われては、寝る場所がない。この酒場には、宿泊施設が二部屋しか用意されていないのだ。

ジンは階段に向かい、まだ人の声がある酒場へ下りていく。ヨナの計画に使用する道具も、いくつか用意する必要がある。しかしそれからすぐ、ジンは下で借りた毛皮を服の上から着込んで二階へ戻り、ヨナの眠る部屋の扉を開けて中に入る。

そのままジンは扉へよりかかるように腰を下ろし、ベッドで眠るヨナの姿を見守りながら手にしたリュートを静かに調律しつつ、時間をつぶすことにした。

それからしばらく。ベッドの中で寝がえりを打つヨナが目を開けると、リュートを抱くようにして扉の前で眠るジンの姿が、暖炉とロウソクの明かりに照らされて見えた。ヨナはその顔をしばし眺めたが、ふたたび目を閉じ、彼に起こされるまで休むことにした。

■／4／

「あー、さぶい。さぶいぞ、ジン！」

むき出しの地面に小さく山をなして置かれた薪木の上で炎が身を踊らせ、照りかえす明かりが無地のマントや皮製の前かけを朱に染める。それほど炎の近くにいても布をマフラーのように巻いたヨナの口元からは、白い息が絶えまなく上がる。

「師匠が薄着だからですよ」

寒さにふるえながら地面に座るヨナの後ろ、息づかいが聞こえるほどの距離で声がする。体をよせて腰を落としたジンが、ヨナの背中へ抱きつかんばかりの姿勢で両腕を広げている。ヨナが普段着の上にマント

を巻いた姿であるのに対し、ジンは長服に毛皮をかさねていた。
「そういう毛皮は嫌いなんだ。着ていると、皮をはぎ取られた動物の姿を想像して可哀想になるだろ――って、こら。動くな、体に触るな！　ヒゲが近い！」
ジンがヨナの後ろで両腕を広げているのは、風よけのためだ。背後には冷気の吹き込む洞窟の入り口があり、その寒さから守るための壁である。本当に近距離のため、どちらかが動くとすぐに体が触れる。もし他人の目があれば、さぞかし仲むつまじく見えるだろう。
ヨナたちが夜半に村を抜け出して出向いた先は、山肌に開いた洞窟の中だ。林の中で倒れていた青年を助けたさい、ヨナは林の奥にある入り口を見つけていたのだ。
「ふむ。やはりこの寒さと乾きでは、じかに色を塗るのは難しいな」
片手にはめた絵筆つきの手袋をはじめ、スケッチブックや絵具入りの筒など。必要な道具はすでに準備され、ヨナは手にした『万理の石』を地面の上に置く。
「となると紙の方を使うか」
あぐらをかいた両ヒザの上にスケッチブックを広げ、ヨナは手袋のない片手でポーチから鉛筆を取り出す。空白の紙面に鉛筆の先が走り、球形の輪郭を描く。
「師匠、やっぱり危険ですよ」
「うるさいぞ、髪に息をかけるな。気持ち悪い」
ヨナの頭上から紙面を見下していたジンは、その言葉に口をつぐみ、岩壁の天井をふりあおぐ。彼女がスケッチブックへ描こうとしているのは『万理の石』だ。石の色で封じた魔巧師の道具を、ふたたび神色師の能力で解除しようというのである。
本来その石は使用者の魔力を引き出し、この世のあらゆる知識をあたえるものだという。またそこには魔巧師の思念も込められている。ならば石を手にして魔巧師の情報を引き出し、その思念に接触をしようというのがヨナの作戦だった。
「だけどそれが作られたのだって、百年以上も昔のはずですよ？」
岩壁を見つめたまま、ジンはあえて否定的な口調で訊ねる。
「仮に何か引き出せても、そんな古い情報がまともな手がかりになりますか？」
封印を解いた石を手にするのは、ヨナの役目だ。彼女自身がそう決めた。だがそこには危険がともなう。石の使用者は、魔巧師の思念に意識を取り込まれる可能性がある。その影響で前に使用した魔女タリザが怪物と化したという話を、ジンはここまでの道中でも聞かされた。
「師匠――」
「石に込められた思念が今のやつとつながっていることは、タリザのときに体験ずみだ。死なぬ身のやつに時間の概念は関係ない」
返答にじれて下を向くジンに、ヨナは手を動かしたまま淡々と答える。彼女が意見

をゆずることなどあり得ない。魔巧師が絡んでいるなら、なおのことだ。それを理解しながら、ジンは胸にかさなる不安を言葉にかえて吐き出さずにはいられなかった。

ジンに命じられたのは、ヨナの意識が魔巧師の思念に取り込まれかけた万が一の場合にそなえて、それを止める役目だ。その役目が逆なら、まだジンも余裕を持てたのだが。

ヨナの鉛筆がスケッチを終える。紙面には精緻な線で描かれた『万理の石』や、それの置かれた地面の質感やこまやかな段差が再現されていた。実物の対象と寸分の狂いもないスケールで再現された絵に色を塗れば、対象の上に色を塗ったときと同じ効果が得られる。つまり紙面の上でも、神色師の能力を発揮することが可能なのだ。

「それなら、やっぱり石を持つ役目は俺の方が」

道中にも同じ提案をしてヨナに却下されたのだが、それでもジンは口にする。

「駄目だといったはずだ。これは私がやるべきことで、お前にやらせることじゃない」

「だけど俺……自信ないですよ。もし師匠の体が魔巧師に操られでもしたら。俺なんか、まともに止められるかどうか」

「それほど大げさなことじゃない。もし危険を感じたら、すぐ石から手を離す。私ならその判断ができるというだけだ。お前の役目は、せいぜい私の手から石を叩き落すぐらいだ」

鉛筆を腰のポーチへおさめたヨナは、その手でベルトのホルスターにさし込んだ筒を開け、片手の絵筆をその中につける。ヨナは背後のジンを見ることなく、言葉を続ける。

「大丈夫だ。私は、お前をそこまで頼りない男に育てたおぼえはない。それに上手く石を使いこなせれば、この山の雪をなんとかする方法もついでに引き出せるかもしれん」

「それは、まあ頼りにしていただけるのは嬉しいことですし。この雪のことは俺だってお世話になった村のために、なんとかしてあげたいとは思いますけど」

だが万が一の場合にそなえてジンを頼りにするということは、ヨナ自身も危険な事態が起こりえる可能性を否定できないということだ。

「かん違いをするなよ。私が信じているのは、お前を育てた私自身の教育法だ。山の雪も先へ進むのに邪魔だから、なんとかしたいだけだ。べつに、あの村のためじゃない」

ヨナの言葉が終わるころ、彼女の片手は紙面の色塗りを完成させていた。

「神技『魔性の緋色』！」

色を塗り終えた絵筆が離れた瞬間。紙面の中で完成した絵が輝きを放ち、一瞬で色が消え失せた。そのかわり地面に置かれた『万理の石』が、宝珠の輝きを取り戻していた。紙面の絵に再現された色が、実物に反映されたのだ。

それは人の傷口から最初に流れ出た血の赤。黒く沈んで見えるほどの赤。地平線に沈む夕陽の外側をふち取る濃厚な赤。近くで炎がゆれているせいか、真紅の宝珠はその色を妖しく変化させ、ジンの目には石そのものが不気味な気配をただよわせているように感じられた。

「さてと」

ヨナは何げなくつぶやいて、石を手に取ろうとする。瞬間、ジンはヨナが触れるよりも早く背後から手を伸ばしていた。毒のある果実や毒虫にヨナの手が触れるように感じられ、それを彼女の前から取り除こうと本能的に体が動いたのだ。

「馬鹿たれ、何を！」

ヨナがふり向いて声を上げたときには、すでにジンは距離を開けていた。

「すいません、俺……」

石を手にして立つジンの表情には、うつろと困惑が見えた。

「何をしているんだ、お前は。早くそれを私によこせ」

かたわらに置かれたリュックの上にスケッチブックをのせ、やれやれと立ち上がる。このときヨナは、ジンの行動が突発的な気の迷いから引き起こされたものだと考えていた。しかし彼は言葉に従わず、ふらふらと後ずさりのまま洞窟の外に出る。

「すいません、俺。でも師匠は万が一でも危険な目に合わせちゃいけない人だと思います。それに俺が師匠を助ける自信はなくても、師匠が俺を助けてくれる自信はありますから」

その言葉でヨナはジンの本気を察する。

洞窟の外には暗闇が広がる。夜空は黒い雲におおわれ、月も星もない。洞窟からもれる炎の明かりは、かろうじて林の影を浮かび上がらせるほどのものだ。その中で、ジンの体が赤い光をおびて見えた。彼の手にした『万理の石』が発光しているのだ。

「ダメだ、ジン。何も考えるな！　その石に何も考えさせるな！」

洞窟を出た入り口の前で、ジンに飛びかかるかスケッチブックを取りに戻るか考えていたヨナは、どちらの行動も取れずに叫んでいた。しかしその声は、ジンの耳に届かない。

ジンは頭に流れ込む膨大な知識にひとつの感情を呼び起こされ、ただそれにふるえていた。

それは理屈を超えた歓喜だ。あらゆる答え。あらゆる肯定。神のごとき全能感覚。一切の疑念が消滅した思考。その瞬間、ジンは世界を掌握した。人知のおよばぬ現象にも発生の構造があり、正しく働きかければ簡単に機能させることができる。

光速で処理される思考に引きずられ、あらゆる感覚が光速化する。ふり注ぐ雪は停止して自然美の方形を見せ、耳の中で様々な音が打ち消し合い無音を作り出す。ヨナの姿は見えていたがそれは動かない人形の

ようで、声も聞こえない。
甘露のごとく思えた知識はしかし止めどない無限の奔流と化し、ジンはその中でおぼれるようにもがいた。世界の質量に等しい知識の前で個人の人格など大海に浮ぶ木の葉に過ぎず、流れに飲まれ、沈もうとする。その中で、ジンは自分に必要な情報だけを必死に取り出そうとしていた。自分の果たすべき役目。それを命じた人。その願い。ヨナ――肺に残された最後の空気をしぼり出すように、ジンの意志は名を呼んだ。
ヨナには一瞬のできごとに見えた。ジンの手にした『万理の石』がひときわ目のくらむような赤い光を放つ。まぶしさに閉じた目を開けたときには、ジンの体が宙に浮いていた。
「飛ぶのかよ」
直立のまま走るほどの早さで上昇していくジンの姿につぶやき、ヨナはマントをひるがえし背後の岩壁に向けて飛ぶ。足をかけた岩壁をさらに蹴り、ヨナの体は曲芸師のごとく角度をえがいて宙に舞う。しかしわずかの差で片腕を伸ばすヨナの前を、ジンの足が上に通過する。
「逃げるな、この！」
首に巻いた布をとっさに外し、ヨナは片手でしならせた布の先をジンに向けて放つ。
だがそれもジンの足に届く手前で下に弾かれる。魔術障壁か――落下するわずかな時間、ヨナはジンにふり注ぐ雪が彼の体をよけていることに気づき、見えない壁の存在を看破する。
「あの馬鹿、また無駄な才能に恵まれてやがる」
着地したヨナは手にした布を放り出して洞窟の中へ駆け込み、スケッチブックを腕に抱えて戻る。魔法の技術は失われても、魔力の素養を秘めた人間は今でも存在する。人によっては複雑な作業でも一度やり方を教えられただけで、すぐにできてしまうのと同じだ。
「さて、どうするか……」
ヨナは空を見上げ、難しい表情で目を細める。『万理の石』が赤く発光しているため、闇夜でもジンの姿を視認することはできる。体が握りこぶしほどの小ささに見える高さだ。
手段はある。ヨナの手にしたスケッチブックにはその石を描いた先ほどの絵があり、そこにまた『石化の灰色』を塗れば、ただの石として封印できる。しかしそれをやれば、魔力の消えたジンが落下する。あの高さから生身で地面に叩きつけられれば、無事ではすまない。
ならば、とヨナは考える。打つ手はまだある。神の感覚を宿した目が見えるかぎり、神色師に不可能はない。だが確実に成功するかは実行してみなければ分からない。
スケッチブックをめくるヨナの手が止まり、紙面を見つめて考える。
「悪いな、ジン。お前の体、少しだけ塗りかえるぞ」
ためらいは一瞬。すぐさま動き出したヨ

ナの片手が、色を塗る絵筆と共に加速する。
紙面には男の裸身が鉛筆の線で描かれていた。うすい胸板、長い手足。アゴにヒゲの生えた顔だけはよけて、紙面に青みをおびた黒一色が塗られる。空いた片手がページをめくる。角度をかえた背中や、部位ごとに描かれた手足にも黒い色が塗られる。
そこに描かれたのはジンの体だ。離れる一年ほど前。まだ西方へいた頃にヨナが描いたものだ。期間は空いているが、体のスケールに変化がなければ神色師の能力が発揮される。
「どうだ！」
ヨナは絵筆を紙面から離す。口ぐせのように出る色彩のタイトルを声にする余裕もない。
一瞬のち、輝きを放つ紙面から色が消え、鉛筆のスケッチだけが残される。すぐさま上空に視線を向けたヨナの目に、徐々に大きくなるジンの体が見えた。落下しているのだ。それもかなりの速度で、ヨナが後ろへ下がったときにはすぐ頭上にジンの姿が見えた。
激突。ずどん、と音は短く、あまりの振動に視界そのものがゆれた。無事を信じているとはいえ、ヨナの背中を冷たい気配がはい上がる。
「ジン、大丈夫か！」
白い積雪が吹き飛び、わずかに露出した地肌。ジンはそこへ埋もれるように横たわり、死んだように動かない。赤い輝きは光を弱めているが、消えていない。まだ石は生きている。
雪煙が消えぬ中、ヨナは足をつかんで引きずり出したジンの体を腕に抱く。わずかに見えるジンの手や首まわりは、ブロンズ像のように黒く硬化していた。
神技『不滅の黒』――神色師の能力だ。激突に耐えられるよう、ジンの体を鉄に変化させたのだ。『万理の石』をそのままにしたのも、魔術障壁による保護を考えてのことだ。
顔は生身だが両目は閉ざされ、口を開けたまま魂が抜けたような表情をしている。石を手にしたときのジンは正気をなくしたように見えたが、狂ってはいなかった。タリザのときと違い体が変化することもなく、暴走もしていない。それほど魔巧師の思念に意識をおかされなかったのだろう。まだ息はある。ヨナの絵筆で肌の色を塗りなおせば、元の体に戻せる。
「しっかりしろ、ジン。すぐに――」
と口にしかけたヨナは異変に気づいた。周囲が明るいのだ。光源は上空。そこに視線を向ければ、こぶし大の光球が浮いていた。ジンの体が浮いていた場所だ。
色は太陽のごとき光量をしめす白。肌に温もりまで感じる。雪が止み、雲の流れが見える。そして光球は小さく縮みはじめる。いや、違う。遠近法だ。光球は上昇しているのだ。
ヨナは危険を感じ、ジンの体を引きずり洞窟へ移動する。中へ逃げ込むと同時に、

ぽん、と何かが破裂するような音が聞こえた。おそらく光球が破裂した音だろうが、分からない。

目を閉じても耐えられぬほどの光。耳元で雷が落ちたような轟音に思考が飛ぶ。洞窟の入り口から吹き込む熱風が、服の上からでも焼けつくように感じられる。ヨナは目も耳も手でふさぐことなく、ジンの体を抱きしめていた。そして泣き声のようにつぶやく。

すまない――と。

■／5／

目を開けているのか閉じているのか、それすらもジンには分からなかった。白い空間が限りなく広がるようにも、目のごく近い距離に白い壁があるようにも見えた。視線を動かそうにも自分の体が見えない。雪の上に倒れているのだろうかと考えたが、冷たさも感じない。

目に見えず、体に感じず、ただ景色が白い。だが何もないのではなく、何もないと感じるものがある。――なら耳は？　音は何か聞こえないか？

「やあ、よく来てくれたね」

ジン自身がもっとも信頼する聴覚に意識を向けたときだ。唐突に声が聞こえ、男の姿があらわれる。前触れもなく目隠しをはずされたような、声が実体を得たような感覚。

「あんたは……」

と声を出したときだ。ジンは自分の体が見えていることに気づいた。手が見え、足が見え、長服を着た体が見えた。着ていたはずの毛皮は消えていた。

「きみには、はじめましてかな。僕の名は、オウレン。きみたちの探す、魔巧師だ」

枯れ葉色の長髪、同色の口ヒゲ。やはり同色の瞳、色あせたブラウン。

男の身長はジンよりもわずかに高い。見た目の年齢もジンより少し上、三十代ぐらいか。格好はジンと似たような長服だが、色は黒だ。足から首までを隠す黒衣。その男が魔巧師。ジンの師であるヨナが生涯のかたきとして追い続ける男。

「いや、待ってくれ。あんた本当に、魔巧師なのか？」

ジンはヨナの描いた絵の中でしか、オウレンの姿を知らない。手がかりを探す旅の途上で魔巧師の作り出した道具やそれに操られた人々は目にしてきたが、本人を見たことはない。目の前にいる男の姿はヨナの描いた絵に酷似していたが、その絵が描かれたのはいつか？　ジンが子供の頃から見てきたことを考えれば、少なくとも数十年以上前だ。

ヨナはオウレンについて、こんなことも話していた。魔巧師の能力により不死の法を実現させ、老いず死なず三百年以上も生き続ける男。

「僕は僕自身でほかの誰かでもないよ。今ここにあるのは実体ではないけれどね――

まあ招待したお客さまに立ち話をさせるのは申しわけない。どうぞ、かけてくれたまえ」

オウレンは整ったしぐさで片腕をふり、手のひらをさし向ける。首だけでふりかえるジンの背後には、ひとり用の黒い椅子が置かれていた。視線を戻せば、すでにオウレンは同じ椅子に腰かけ、ふたたび着席をうながすように手のひらをさし向ける。

「いや、そうじゃない。これは俺が見ている夢なのかもしれない。だとしたら、あんたは魔巧師かもしれないけど。それは俺の意識が作り出したまぼろしで、話しても意味がない」

「中々きみは、丁寧な思考をする人だね。これがきみの見ている夢かどうかは、僕と会話して判断すればいいことだよ、ジン・クエッティくん」

オウレンの口元には好意的とさえ思える笑みが浮かぶ。椅子に座るジンは、いざ魔巧師を目の前にして混乱する頭に片手を置く。敵として考えてきた相手だ。会えば戦いは必然。なごやかに会話する状況など、想定していない。

「それなら、聞きたいことがある。今のあんたは、どこで何をしている？」

「きみはそれを聞いて、どうするつもりかな？」

即座に質問をかえされ、ジンは言葉につまる。

「……師匠――ヨナに、あんたの居場所を教える」

「そう。僕を探しているのは彼女で、きみには関係ないはずだ。僕自身も、きみにはなんの恨みもない。むしろ親しくなりたいぐらいだ」

自分には関係ない――その言葉は鋭利な針として痛みをともない、ジンの心を突き刺す。

「俺は、あんたの作り出した道具のせいで不幸な目に合わされた人たちを見てきた。それに俺も聖音師だ。あんたやヨナと同じ立場の人間として、見のがすことはできない」

「それは主観の違いだよ、クエッティくん。きみたちが僕の道具を危険なものとして破壊し、封印していることは知っている。それはかまわない。いずれ道具は壊れるものだからね」

ジンの迷いをよそに、オウレンは友好的な笑みを絶やすことなく続ける。

「けれど道具を手にした人間が不幸になるかどうかは、使い方の問題だよ。たとえば、きみの大切な人が剣で切り殺されたとしよう。きみは、その剣を作り出した人間を恨むかい？　それよりもまず、殺した相手の方を恨むはずだろう」

ヨナほどではないが、ジンも魔巧師の道具が生んだ結末を見てきた。死骸を養分にして金銀を実らせる『黄金樹』。永遠に消えることのない『不滅の炎』。それらをめぐり争う人々。

ジンはその悲劇を目の当たりにして、や

り場のない怒りを感じた。許さないと心に決めた。しかしそれを生み出した張本人を前にして、ジンの怒りはいっこうに燃焼を起こさない。そのせいで心に戸惑いを感じ、めまいのような不快感をおぼえる。――果たして自分は、何を怒りの対象として感じてきたのか。

「僕は他人を不幸にする目的で魔巧師の能力を利用したことは、一度もないよ。いつでも誰かの願いをかなえるためさ。けれどヨナは違う。彼女は僕を倒すという個人的な目的のために、神色師の能力を利用している。僕らの能力はそんなことに使うべきではない。きみたちは神の感覚を授けられた人間として、進むべき道を間違えている」

「それは、あんたが……彼女の両親を殺したからだろ！」

片手のこぶしを眉間に叩きつけ、ジンは不快感を打ち消すように声を絞り出す。

それでもオウレンは表情をくずさない。まるでヒントをあたえ続けた教え子がようやく本題にたどりついたことを喜ぶ教師のように、いっそうの笑みを浮べる。

「情報は正確に表現すべきだよ、クエッティくん。ヨナは孤児だ。あの子の両親が死んだのは戦火に焼かれたせいだ。きみがいうのは、彼女を養女として育てた僕の両親だろう？」

先代の魔巧師イリナ・ベルカウンター。同じく先代の神色師ダン・ベルカウンター。それがヨナの養母と養父であり、オウレンの両親でもある。つまりふたりは形式上の兄妹なのだ。

「ああ、そうか。きみも小さいとき、親に捨てられたところをヨナに拾われていたね。それなら両親をかん違いするのも仕方ない」

「それがどうした、親にはかわりないだろ！」

ヨナの養親を、実子であるオウレンが殺害した。それが両者の因縁だ。くわしい経緯はジンも知らない。ヨナから聞いた以上の話を、ジンの方から掘りかえすことはできない。親が禁忌として秘めていることを、子供に訊けるわけがないのだ。

「それも一方的な見解だよ。情報を正しく判断するには、主観の異なる双方の意見を聞くことが必要だ。きみが彼女から聞いた言葉が、正確な事実であるとは限らないだろう」

椅子の背もたれに体をあずけるオウレンは手を組み合わせ、ゆっくりと足を組む。

「僕が両親の死に関係していることは確かだよ。けれど殺したというのは誤解だ。あれは事故だからね。僕に罪を問うとしたら過失の死。その罪にしても原因は父にある」

先に殺されたのは母のイリナだと、ジンはヨナから聞いている。オウレンは魔巧師の能力を手に入れるために、先代の魔巧師である母を殺したのだと。

「きみも聖音師なら、試練を受けたはずだね？」

ジンは無言で肯定する。神の感覚を身に

つけるためには『狂える神の館』へ通じる入り口を開き、そこで試練を受ける必要がある。また能力を行使し続けるためには十年後にふたたび同じ試練を受け、再度その資格者であることを示さなければならない。

ジンも一度は受けているのだが、館での記憶は消されてしまうため試練の内容はおぼえていない。現役の能力者でも、悪くすれば次回の試練で資格を失う可能性が十分にある。

「僕が母に同行して、試練の存在を教えられたのは十七のときだ。両親は、僕とヨナに魔巧師と神色師をゆずろうとしていたからね。けれど十年なんて、僕には待てなかった。僕が魔巧師になれば、すぐにでも母以上に能力を使いこなせると確信していた」

「それで、お母さんを殺したのか」

十年ごとの試練を待たずとも現役の能力者が死ねば、その資格は空位となる。

「だから誤解だよ。確かに魔巧師の能力を得るため、母を死にいたらせた。けれど僕は魔巧師の能力を手に入れたあと、きちんと母を再生させるつもりだった。魔巧師の能力を借りれば、それが可能だったからね」

「再生？」

「そう。必要なのは魔巧師の資格だけで、母を殺す気はなかった。生きかえらせることを前提とした殺人は、殺人といえるかい？　邪魔な木を抜けば死ぬ。それをべつの場所に植えれば、ただの植栽だよ。同じことさ。僕は母の体を保管して再生の手順を父に書き残し、試練を受けた。そして予定どおり魔巧師の能力を手に入れた。けれど父は、母を埋葬していたんだ」

オウレンは悲劇を語る役者のように腕を広げ、言葉のないジンへ饒舌に続ける。

「さらに父は、僕に絶縁を突きつけて殺そうとした。僕は仕方なく逃げた。母の再生が不可能なら、父との争いは無意味だ。僕には魔巧師としてやるべき目的もあった。そのために僕は不死の法を早々に開発して自分の体にほどこした。父は僕を狙い続けたけれど、放っておいても父の命が先につきる。だけど許せないことに、父は自分の復讐にヨナを巻き込んだ！　神色師の能力でヨナに不死をあたえ、僕と戦わせようとした。だから父を殺した。父の指示がなければヨナも戦いを止めると考えた。けれど結果は、今のとおりだ」

分かるだろう？　と同意を求めるようにオウレンは言葉を止め、ジンの表情を見つめる。しかしジンにはまるで共感できない。できるはずがない。

「ようするに、全部あんたのせいじゃないか……あんたが彼女の人生を、狂わせたんだ！」

燃焼の手前でくすぶっていた怒りが、にわかに熱をおびる。ヨナのために。師であり育ての母であり、無二の女性である彼女を火種に、ジンの心は赤く焼ける。

「もちろん責任は感じている。ヨナを巻き込む前に父を殺しておけばとね。だから彼

女には手を出していない。最愛の妹を殺したくないんだ。そこで、きみに頼みがある。ヨナに戦いを止めて僕に協力するよう、話してもらえるかい？　僕の目的には、あの子が必要なんだ」

「ふざけるな！」

たかぶる心に動かされるままジンは椅子を立ち、オウレンに殴りかかる。しかし伸ばした腕が届く寸前でオウレンの体が、わずかに遠ざかる。いや、彼は椅子に腰かけて足を組んだまま動いていない。何かがジンの足を引き止めたのだ。

「きみにも損のある話ではないよ。僕に協力すれば、きみに不死の命をあげよう。今のままならヨナは年を取らず、きみだけが老いていく。いずれきみは彼女のそばにいられなくなる」

ジンはオウレンの顔と交互して、自分の足元に視線を向ける。足首から先が白い空間に飲み込まれ消えていた。泥沼へはまり込んだように、両足が持ち上がらない。

「まあ協力してくれなくても、きみの存在自体が有効だからね。たとえばきみの意識をこのまま戻さずに、きみを助けることを条件にヨナを説得したらどうなるかな」

「黙れよ！　あんたは、駄目だ。俺はヨナと協力して、あんたを倒す」

怒りとあせりの中で体を動かそうとするジンだが、足はもがくほど白い空間に落ちてゆく。ジンは歯をかみ締め、息を飲む。足はすでに太ももまで沈み、微動だにできない。

「それは不可能だよ、クエッティくん。時間を固定することで永遠を手に入れたヨナに、たえず進化することで永遠を実現させた僕を上まわることはできない」

余裕の表情で椅子に座るオウレンを、ジンはわずかに見上げて睨む。もはや下半身の動かないジンにできる抵抗は、声の反論と眼光をぶつけることだけだ。しかしジンの頭にはひとつの方策が浮んでいた。戦いとなれば、聖音師には楽器を使う以外の方法がある。

「あんたの目的はなんだ？　親を殺して、永遠に生きて、あんた本当に何がしたいんだ？」

問いかけで気を引きながら、ジンは頭に想像する。『万理の石』を手にして得たイメージが発想を補足する。魔術、知識、創造。その本質は世界を正しく理解することだ。

「教えたはずだよ。僕の目的は他人の願いをかなえることだ。そのために魔巧師の能力を手に入れたんだ。この世界が悲しみに満ちているのは、世界が不完全なせいだ。どれほど優れた道具を作ろうと、使われる環境が不完全では機能しない。だから僕は完全な世界を作る。この世を創造した神の感覚を受けつぐものとして、それこそが取るべき道だよ」

「何が、他人のためだ。結局あんたは、自分が試したいものを自分の好きなように作りたいだけだろ。人助けの名目があれば、何をしても許されるのか！」

――天と地。水、熱、風。氷結、摩擦。砕けて、落ちる。鳴り響く。刹那の解離現象。

想像力に喚起され、下半身が消えかけたジンの胸からノドの辺りで、ごおごおと濁流のような音がする。声帯だけでなく内臓や骨、体内の隙間、全身で音を生む、イメージ。

「当然だよ。死にたくない、苦しみたくない。それは生物が何よりも優先する共通の願いだ。たとえ過去のひとりを不幸にしても未来に千人の幸福があれば、その負債は清算され――」

ぐごぉん、とオウレンの言葉をかき消し、その瞬間。大きく開けたジンの口から閃光がほとばしり、轟音と共にオウレンの体をつらぬき、光の矢が白い空間を直線状に走り抜ける。

聖音『雷声』――完全なる音を操ることで、事象に影響を及ぼす能力。

ジンが正確に再現した雷鳴は稲妻を生み出し、オウレンの体を吹き飛ばしたのだ。あまりの光と音に、ジンの意識は一瞬だけ飛ぶ。気づけば目の前にオウレンの姿や椅子はなく、下半身も元に戻り、靴の先を起点に焼け焦げたような一条の黒い道筋がどこまでも伸びていた。さらにそれはまだ焼け続けているように白い空間を侵食し、じわじわと道幅を広げている。

「やれやれ、危ないね。現実の世界で同じことをしたら、きみの頭が吹き飛んでいたよ。まあヨナが外で『万理の石』を封印したようだから、僕も話を切り上げるところだったけれど」

周囲へ反響するようにオウレンの声がする。しかし姿が見えない。ジンはオウレンを探して視線をめぐらせつつ、反響する言葉に負けぬほど声をはり上げる。

「ヨナにできなくても、俺があんたを殺すよ！　彼女や地喰師のご老体が、あんたを危険だという理由が分かった。あんたが死ねば、ヨナも過去から解放されるんだろ！　そうすれば俺と同じ時間を歩ける。俺が、彼女の未来になる！」

「それでもかまわないよ。きみがヨナを想うほど、彼女を助ける状況できみは僕の協力を必要とする。神と魔をつなぐ聖人、それがきみの運命さ。僕はこの地の北で待っている。きみは僕の前まで無事にヨナをエスコートしてくれ。頼んだよ、クエッティくん」

直後に、景色が暗転。視界から白い空間が消え、オウレンの気配も消える。意識が暗闇の中へ沈んでゆく中で、ジンはすぐそばで自分の名前を呼ぶ声を聞いた。

■／6／

（ジン……ジン……ジン）

薄く開いたジンの目は焦点が合わず、ヨナの顔をぼんやりと映す。どこか不安げな様子で見下ろしたヨナの表情には普段の威厳がなく、憔悴したようにも見える。

ジンは片腕を持ち上げ、ヨナの頬に触れ

ようと片手をふらふらと伸ばす。そしてヨナはジンの腰をかかえ込むようにして両腕をまわし、ジンの重心をへその上でささえるようにして立ち上がり、その体を持ち上げたまま反動をつけて上体を後背へ反らす。

「意識が回復したのならさっさと起きろ、この馬鹿たれ！」

「えぇぇぇぇぇっ！」

ヨナに放り投げられたジンの体が低空の放物線を描いて、洞窟の外へ飛び出す。地面に落下する瞬間、ジンは肩から接触するように体勢をずらして転がり、受け身で衝撃を逃がす。

「何をするんですか、師匠！」

「神技『投げっぱなしスープレックス』だ！」

「タイトルじゃなくて、投げられた理由を教えてください！」

むき出しの地面に体を起こしたジンは借りものである毛皮についた泥を気にしつつ、洞窟の入り口で腕組みをして仁王立ちのポーズを取るヨナに声を上げる。――はて？　とそこでジンは異変に気づいた。洞窟の外を埋めつくしていた雪が消えているのだ。

見上げる空は墨色の天頂から青みがかる地平に向けて、夜の終わりを示すグラデーション。雲はなく猫目のようなアーモンド型の月が、まろやかに色素の抜けた銀の輝きを放ち、数えられないほどの星々が光の粒として無数に浮いている。まだ暗さは残るが月と星の光だけでも、おたがいの顔を認識できるほどの明るさはある。

「何があったんですか、これ……」

「お前、何もおぼえていないのか？」

洞窟の外へ出たヨナはジンのかたわらで歩みを止め、状況を簡単に説明する。

解放された『万理の石』を手にしたジンがヨナの声に反応せず、魔法を使用して宙を飛んだこと。ジンを止めることはできたが上空に残された光球が破裂し、辺りの天候を一変させたこと。石はその後ヨナが封印して、ふたたびリュックの中へしまい込まれている。

ジンがおぼえているのは、ヨナの背後から手を伸ばして石を取り上げたところまでだ。ジンもまた、意識をなくしている間に体験した魔巧師オウレンとの対話をヨナに話す。

「やつの思念と接触できたのか？」

「たぶん、ですけど」

目ざめて数分のことだが、すでに記憶は消化されつつある。言葉を交わした感覚はあるのだが詳細を表現できず、夢ではないと断言できるほどの実感も今はない。ジンは会話の内容を断片的に拾い、両親の死についてオウレンの口から出た言葉は伏せて「この地の北で待つ」と告げられたことをヨナに伝える。そして返答を待つこと、わずか。

そうか……、とヨナは深く思考を働かせているような口調で、慎重につぶやく。

「まあ手がかりは、つかめたわけだな」

「そう、ですね」
確かに目的を果たすことはできたが、ジンはすっきりしないわだかまりを心に感じる。作戦を無視して石に触れたことを謝ろうかとも考えたが、普段どおりの説教が今のヨナから聞けない可能性を不安に思い、ジンは口を閉ざす。
地面に座り込むジンを残して、ヨナは洞窟へ引きかえす。そしてしばらく、スケッチブックを入れたカバンを肩にかけ、布に包まれた大きな荷物を手にしてヨナが外に出てくる。
「とりあえず、ゆき先は見えたんだ。やることを片づけて、やつの元へ向かうぞ」
ヨナはいつもの調子で口元に強気な笑みを浮かべ、ふりかえるジンの前に布を取りはずしたリュートをさし出す。ジンはそれを受け取り、表情をゆるめて立ち上がる。
「派手に仕上げといきますか」
冬枯れの木々が青く浮かび上がる林へ向きなおり、ジンは両手にリュートをかまえる。
「師匠！　俺たちが山の冬を終わらせようとしているのは、村の人たちを助けるために正しいことなんですよね？」
林の中へふみ入ろうとしていたヨナは、ジンの声にふり返る。
「まだ寝ぼけているのか、ジン。いっただろ、私が雪を消したいのは先へ進むのに邪魔だからだ。例えそれが誰のためになろうと、私には関係ない」
その言葉で、ジンの胸につかえていた最後のものが取れる。
オウレンが「北で待つ」と告げたところで真実とは限らず、罠が用意されていることも考えられる。それでもヨナは、北へ向かう。そこにはジンも同行する。ヨナや誰かに命じられたからではなく自分の意志で、彼女を守るために。そのために身につけた、ちからだ。
ジンは目を閉じて指先と頭のイメージに集中し、リュートの弦を弾く。例のごとくその指が演奏するのは単純な楽曲ではなく、聖音師の能力で再現された天地自然の音だ。
数百の羽音。バザザザザアア、と無数の鳥たちが翼をはばたかせ、飛び交う音。そして鳴き声。くうぇい、きゃあきゃあ、と。ジンは口を開けて、声を放つ。オウレンの前でも雷鳴を再現したが、元より声帯模写はお手のものだ。くぉーん、と肉食する獣の遠吠え。目をさませ、と冬眠する山の動物たちを呼び起こす。春の音を聴け、と。
彼方から飛来した鳥の一群が編隊をなし、見上げた夜空を舞う。ヨナは林の中でもひときわ高さのある木を選び、ハシゴを登るような気軽さで太い幹に手足を伸ばす。そして登りつめた木の上で林から飛び抜けた枝に足をかけ、体を幹へ預けるようにして立つ。
「んーいい景色だ」
わずかな風でも足元にゆれを感じるほどの高さだが、ヨナは余裕の表情で辺りの絶景を見渡す。眼下の地面は部分的に土を露

出させていたが、まだ雪も残されている。ヨナは枝の根元に腰かけて鉛筆を手に、ヒザの上で広げたスケッチブックに眼下の景色を描き込む。そしてポーチから取り出した絵筆つきの手袋を片手にはめて、着色する。

「神技『雪解けの茶色』！」

描かれた地面の全体に露出した土の色が塗られ、ヨナの眼下から一瞬で雪が消え去る。目に見える範囲であれば、そのすべてに神色師の能力が及ぶ。そしてヨナは枝に腰かけた体ごと視線の向きをかえ、新たな絵を描きはじめた。

やがて夜空は徐々に青みを増して、星の光も数を減らしてゆく。白みはじめた地平には黄金の輝きと共に、朝日の輪郭がゆっくりと顔をのぞかせる。

生まれ立ての清浄な黄色の光が、洞窟にさし込む。中で岩壁に背中を預け、体を休めていたジンは湯気の立つカップを手にして、輝きに目を細める。さすがに疲労の限界だ。

カップの中身は酒場で拝借した酒に、たき火で温めたお湯を混ぜたもの。片手には同じく酒場から拝借した、ほし肉。それを少しかじり、カップの中に入れて肉をふやけさせる。

「師匠も、少し休んだらどうですか？」

火を挟んだ向かい側に座るヨナはスケッチブックを広げ、また絵を描こうとしている。

「私は大丈夫だ。いつもの体に戻れば、疲れは消えるからな」

片手の絵筆を紙面に走らせつつ、ヨナは答える。――となると、またしばらく今の姿をしたヨナは見おさめになるわけだ。そう思いながら、カップの中身を口元にかたむける。成長して色づいた今の容姿が好きなジンには、いささか残念なことである。

ジンの位置からは見えないが、ヨナが何を描いているのかは分かる。おさない少女が未成熟な裸身のまま、両足を閉じて椅子に腰かけた絵だ。当時十五歳のヨナを描いた絵である。オリジナルは先代の神色師であり彼女の養父であるダンが描いたもので、神色師の能力を身につけたヨナがそれを模写したのだ。

いかに神色師の能力で紙面に完全な色を再現しても、目の前にある現在の対象と同じ色を塗るのでは、何も変化はおきない。しかし過去の色とスケールを記憶して紙面にそれが再現されたとき、時間の進行により変化した同一の対象はどうなるか？

「神技『清純の肌色』！」

一瞬の輝きを放つ紙面から色が消え、鉛筆で描かれた少女の裸像だけが残される。

「お疲れさまでした、師匠」

ジンはおだやかな表情で、姿の変化したヨナにねぎらいの言葉をかける。一方、かえされるヨナの声は少年とも少女ともつかない、未分化のソプラノ音調だ。

「ああ。気をつけろ、ジン。この姿のときは師匠でなく、名前で呼べといっているだ

ろ」
　ひとまわり大きさの増した皮製の前かけや服のサイズを調整しながら、ヨナはジンを注意する。しかしその口調は迫力よりも、あどけなさが感じられる。
　ジンの前にいるのは少女の姿をしたヨナだ。確かに大人のジンが、今の彼女を師匠と呼ぶのは不自然だ。いつもは十五歳の少女として過ごし、神色師の能力を全開にするときだけ大人になり、終われば少女に戻る。ヨナの養父は、二十五歳の彼女を描いた絵も残していた。
　二枚の絵と神色師の能力。それを利用することでヨナは自ら体の色を塗りかえ、少女と大人の姿を交互にくり返し、その先へ進むことのない時間の中で若さを保ち続けている。
　それがヨナにほどこされた不死の法であり、数百年に及ぶ神色師の呪縛だ。
　動く対象に色を塗る場合など、運動的な面は大人の体でなければ難しいが、少女の姿でも神色師の能力を使うことはできる。能力の不足した少女の姿でいるのは、不慮の事態で神色師の能力を喪失した場合に備えてのことだ。正攻法での再取得に十年の歳月を要する状況では、若い姿でいた方が感覚のおとろえもなく確実に試練を突破することができる。
「あー長いこと大人でいると、こっちの体は軽くていいな」
　ヨナは体を動かしつつ立ち上がり、スケッチブックや絵筆つきの手袋を片づける。そして荷物から取り出した布を、頭に巻いて結ぶ。髪まで隠れてしまうと、本当に外見からでは少女か少年か分からない。かさねがさね、ジンには残念なことだ。
「もう行くんですか？　師匠――ヨナ」
　リュックとカバンを肩にかけて洞窟を出ようとするヨナに、ジンは訊ねる。
「ああ。私はな。お前はまだ休んでいてかまわないし、そのあとで村に戻れ」
「えっ？　俺も一緒に動かなくていいんですか」
「借りたものを返す必要もあるし、急にふたりとも姿を消したら怪しいだろ。私は少し山を見てまわるから、それまでは村にいてかまわんぞ。ついでに春祭りの手伝いでもしてこい」
「そう、ですね。山の方もまだ雪が解けてない場所があるだろうし。上空で爆発した影響も気になるところですよね。悪くすれば、何かの被害が出ているかもしれないし」
「そんなことは知らん。私は山の風景を描きたいだけだ。ひととおり片づいたら、ふもとの町で合流するからな。今度は私を待たせるなよ」
「分かりましたよ、ヨナ」
　外見が変化しても中身は同じままだ。ジンはカップの中身を苦笑と共に飲み込む。そしてジンを洞窟に残し、ヨナは朝日のさす林の中へ消える。ジンはぼんやりと、大きな荷物を小さな体にゆらした後ろ姿を見送る。疲労と酒が、いよいよ眠気を誘う。

時間を固定することで永遠を手に入れたヨナ。意識の世界でオウレンに告げられた言葉がジンの頭をよぎる。不老不死といえば聞こえはいいかもしれないが、その言葉を聞いたあとでは彼女が弱く悲しい存在に思える。

魔巧師、オウレン。果たして自分にあの男を倒し、ヨナを過去の因縁から救うことができるのだろうか――ほし肉をかみ締め、目を閉じるジンの胸に暗い情念がわずかにわいた。

その後。カルド族の村に帰りついたジンが酒場に顔を出すと、店内は中々の大騒ぎで人があふれていた。一夜を明けて季節が移行したのだから、騒ぐのも当然だ。あるものは夜空に輝くまばゆい光を見たといい、またあるものは雷鳴のような轟音を聞いたという。

「おう、あんちゃんか」

とジンの帰りに気づいた村長だけは、かわらぬ反応だった。さすがに度胸が違う。毛皮や薪木を借りた弁明として、外の異変を見ようと夜中に出かけたと村長に説明したが、ジンが消えたことにさえ気づかなかったらしい。ヨナについても説明以上のことは追求しなかった。

結果としてカルド族の人々は、一夜の変化を山の女神エリルが起こした奇跡として受け入れた。山がどれほどひどい悪天候をもたらしても、最終的には帳尻が合うようにできているのだと、彼らは信じていた。自然に宿る神々や精霊の存在を無心で信じられる感性は、どれほど優れた文明や技術よりも、人の心に幸福をもたらすようだ。

何より村人たちは春のおとずれを喜んでいた。待ち望んでいた春祭りができるのだ。その準備は数日で進められ、山の中腹にあるエリルのやしろを集会場として、山で暮らすカルド族の人々が一堂に会した。ジンは準備の段階から、その中に参加していた。

三日三晩の春祭りだ。人々はよく踊り、よく唄い、よく呑んだ。さまざまなイベントが絶え間なく続いた。去年に婚約した恋人たちの婚礼がおごそかに行われ、そこには林の中で遭難したところをヨナに救われた、ギート青年の姿も見られた。

今年あらたな婚約者たちを決める儀式も、はげしく行われた。男たちによる狩りも早速はじめられ、獲れたばかりの肉が祭りの中でふるまわれた。後半にはふもとの町に住む人々も祭りに参加し、そこからまた盛り上がりを見せた。ふもとから持ち込まれた穀物や衣料と引きかえに、動物の毛皮や家畜が引き渡された。その年はじめての交易が、そこで行われたのだ。

一年ごとの行事として娯楽や儀礼の目的だけでなく、きちんと実用的な意味がある。ジンはそこに人間の本来あるべき営みを見たような気がした。

祭りを見届け、その数日後。ジンは村を出ることにした。昼に近い時間だが酒場は閑散として人の姿がなかった。カルド族の

男たちは開始された狩りに忙しく、昼間から酒を呑むものなどいないのだ。とはいえ店の主人である村長も暇ではなく、ふもとから荷物を運んできた商人の男と店の一角で話し込んでいた。それゆえジンを見送る人間は、皆無であった。

「それじゃあ、お世話になりました」

と村長に声をかけたが商談中のため、「おう、元気でな」とそっけない返事だ。いくら事情を知らないとはいえ、山に春をもたらした活躍を考えれば淋しい限りではある。

まあ旅立ちなどこんなものか、と思いつつ荷物を手にして外に向かうジンだったが。

「ああ？　こりゃあ、なんだい」

と驚きの声を上げる村長に足を止め、ふりかえる。見れば荷物を開けた村長が、中から出てきたものに困惑していた。それは額入りの絵だ。寸法は縦に長く、両腕に抱えるほど。

ジンはそこへ歩みより、絵の内容を見る。額は手作りの木製で、カンバスには先日に行われたカルド族の春祭りが、鮮やかな色彩で描かれていた。サインの記名はないが、ジンには誰が描いたものか判別できた。おそらく外から祭りの様子を見ていたのだろう。

「うーん。こりゃまあ、たいそうなものだが」

「いい絵じゃないですか。どこか店に飾っておけばいいと思いますよ」

受け取る理由を悩む村長に、ジンは笑みを浮べる。商人に訊くと、旅人らしい女から村に届けてくれと頼まれたとの話だった。宿代がわりのつもりだろうか。そこでジンは思いついて、何か書くものはないかと商人に訊ね、鉛筆と紙の切れ端を借りて、一筆すべらせる。

「これを絵の下につけておくといいですよ」

絵の説明です、と村長に教え、ジンは酒場をあとにする。絵を描いた本人が知れば怒るかもしれないが、彼女の性格を考えれば春祭りをえがいたことをジンに話すはずがない。書かれたのは西方圏の文字であるため、この付近で読める人間もいないだろう。

気難しい本人にかわり、サインを書いただけのことだ――『ヨナ・ベルカウンター』と。

【了】